私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、
学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。
今回は石井教授と百々講師のお二人に、
当時の様子を語っていただきました。

北海道（医療大）に来て変わったこと

歯学部
歯学科
教授　石井　久淑

北海道当別町での生活は、大学生時代から現在に至るまで（学生及び教員として）20年余りが過ぎました。長いようであっという間だった北海道の生活で、3つのことがそれまでの自らの人生から大きく変わったと感じています。

一つ目は、本学歯学部に入学して親元を離れた生活が始まったことです。独り暮らしは天国のような日々でした。テレビ、外出、食事など身の回りのもの全てが自由となり、とてつもない開放感にときめいたことを思い出します。それとともに、社会での一個人としての自分に対する他人の評価の厳しさと自由ゆえの責任の重さを感じた苦い思い出も少なくありません。そして、いつでも誰かに見られていることを意識して、責任を持った行動や言動を心がけるようになりました。

余計な雑音（?）を排除して、「歯」と向き合っていた頃の私

2つ目は、気候です。本州出身の私は北海道に来るまで、雪を見たことがありませんでした。周りの人からは「寒さが厳しくて大変でしょう。」と同情の言葉をよくいただきました。しかしながら、寒さに嫌気がさして、雪がない本州に帰りたいと思ったことはありませんでした。その大きな要因はスギ花粉が北海道には少ないことです。長年のスギ花粉アレルギーに悩まされていた私にとって、北海道は天国に一番近い島のようでした（島といえば島ですが）。そして、アレルギー治療における抗原除去療法の効果と重要性を身をもって認識しました。日常生活においても、余計な雑音（抗原）を排除して、物事の本質に全力で向かう努力をするようになりました。

3つ目は人です。人付き合いはどこにいってもなくなることはなく、健全な精神と肉体を養うためには不可欠なものだと思います。特に、北海道の人口密度と人との距離は物理的及び精神的にも最もベストな環境といえるのではないでしょうか。大都市での人為的な大渋滞では耐えがたい苛立ちを感じますが、北海道の猛吹雪による交通障害に対しては、大自然の偉大さに感服し脱帽することもしばしばです。自然は侮ることができません。幾度となく猛吹雪で遭難しかけたときに（雪山ではなく大学の行き帰りの道路にて）、自らの危険を顧みず、声をかけて車を引っ張り出してくれた人達に命を救われることも少なからず経験しました。この頃から、いい人になりたいと努力するようになったのかもしれません。

学生時代（20代ぐらい）は、卒業したら周りの先生や社会人みたいな素敵な（?）大人になっているんだろうなぁと将来に対して憧憬的で楽観的な見通しを抱いておりました。しかし、卒業して20年後、40代を迎えた現実の自分は今までと本質的には何も変わっていないような気がします。しかし、立場は年齢とともに変化して、将来を夢見ていた頃の自分と同年代の現在の学生さん達は、その立場での自分を当時と同じ目線でみていることに最近気づいてきました（良いことも悪いことも）。ですから、「自分」作りの集大成の場としての大学生活の役割の大きさとそれに携わる我々の責任の重さを感ぜずにはいられません。

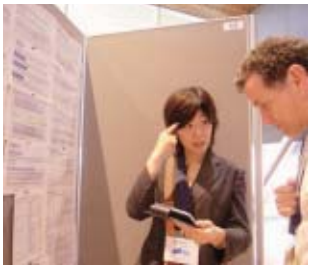
私の学生時代

心理科学部
臨床心理科
講師　百々　尚美

私は学生生活を2度過ごしています。1度目は高校卒業後、広島修道大学へ進学してから博士前期課程までを過ごした6年間。2度目は○○年後（そこは詳しくは聞かないでください）の北海道医療大学博士後期課程での3年間です。

1度目の学生生活は、生理心理学の実験に明け暮れた日々でした。毎日、脳波を測定する実験室かその隣の実験処理室で朝から晩まで過ごしていました。当時の実験室では、ようやくミニコンピューターからパーソナルコンピューターへと移行していた頃で、実験を開始するには毎回自分でプログラムを作るところから始めなくてはいけません。そのため毎晩パソコンの前でせっせとプログラムを作ってはバグの検出をしていました。ですが、折角出来上がったプログラムを一晩走らせても、当時のパソコンのスペックではなかなか処理が進まず、やきもきしながらパソコンの前で待機していたことを覚えています。一日中実験室の中で過ごしていたので台風が来ていることも知らず（広島では毎年最低1回は台風が上陸していました）一晩過ごし、翌朝指導の先生が心配して実験室へいらっしゃった時、「おはようございます。先生、今朝は早いですね。」ととぼけたことを言ったこともあります。この話は未だに、当時の先輩達の笑い話にされています。

2度目の学生生活は、大阪の大学で教員として働きながらの二足のわらじでの生活でした。毎週学生の自分と教員としての自分を飛行機の中で切り替えて大学へ通っていました。寝ていてもきちんと空港に到着できるので、飛行機での移動はさほど苦ではありませんでしたが、熱心な院生さんたちとのディスカッションには毎回自分自身の勉強不足を痛感していました。指導教官の坂野雄二先生のご指導と、坂野研究室の院生さんたちの温かい励ましがあったからこそ、博士後期課程の3年間を充実して過ごすことができたと思います。写真は坂野先生と院生さんたちとともにバルセロナの学会へ参加した時のものです。



博士課程在籍中、バルセロナの国際学会にて（中央が私）

振り返ってみると、私の1度目の学生生活はがむしゃらに突き進んでいった日々でした。これはおそらく10代後半、20代前半の若さに任せてのものだと思います。2度目の学生生活は、若くはありませんでしたが、多少なりとも社会生活を体験した中から湧き出た興味や疑問を探求したいという思いから邁進することができました。

研究についての疑問や興味は何歳になっても尽きるものではありません。もし皆さんが、「もうよい歳だから」とか、「大学を出たらもう勉強なんて」と考えているのならば、私自身の体験をもとに、何歳からでも学生生活に勤しむことはできるということをお伝えしたいと思います。大学は何歳になっても探究心を揺さぶられる貴重な場所です。皆さんの御健闘を祈ります。